

論文概要

アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派における自己顕照論の展開

真鍋 智裕

本学位請求論文（以下本稿）では、12世紀に活動したアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派（アドヴァイタ学派）の学匠シュリーハルシャ（Śrīharṣa）が、その著書 *Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā* (Kh) において行った識 (vijñāna) の自己顕照 (svaprakāśa) 論証を中心に、アドヴァイタ学派の自己顕照論証の思想史的展開に関して考察を行った。

シュリーハルシャの識の自己顕照論証は、その論証形式が、瑜伽行派の言を借りる体裁を採る点、アドヴァイタ学派内でもあまり類似の議論が見られない点等で特徴的であるため、それは彼の独創によるものであるのか、或いはアドヴァイタ学派の伝統的な教説に依るのか、ということが問題となる。そのため、Khに見られる識の自己顕照論証を解説すると共に、彼以前のアドヴァイタ学派の文献においてパラレルな自己顕照論証が見られないかどうか、ということに注目し、彼以前のアドヴァイタ学派の文献も検討した。更に、同様の観点から、彼以降のアドヴァイタ学派の文献をも検討した。結論を先取りして言えば、その際に検討したアドヴァイタ学派の文献は、シュリーハルシャ以前のものでは、シャンカラ (Śaṅkara, ca. 700-750) の著作 *Brahmasūtrabhāṣya* (BSBh) と *Bhagavadgītābhāṣya* (BhGBh), ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspatiśra, ca. 9-10th) の著作 *Bhāmātī* (Bhā), アーナンダボーダ (Ānandabodha, ca. 10-11th) の著作 *Nyāyamakaranda* (NMa) である。そして、シュリーハルシャ以降のアドヴァイタ学派の文献は、チツカ (Citsukha, ca. 13th 前半) の著書 *Tattvapradīpikā* (TP) である。

このように、本稿では、Khに見られる識の自己顕照論証を中心としてアドヴァイタ学派の文献に見られる自己顕照論を検討することによって、アドヴァイタ学派における自己顕照論の思想史的展開の一端を明らかにすることを研究目的としている。

本稿は、第一部研究篇、第二部資料篇の二部構成をとっており、第一部では、上述の問題点に関しての具体的な考察を行った。第二部では、第一部で検討を加えたアドヴァイタ学派の文献に関して、テキストと和訳を掲載した。

第一部 研究篇：アドヴァイタ学派における自己顕照論証の思想史的展開

第一章 序論

第一部第一章序論では、先ず、先行研究に基づき、アドヴァイタ学派における自己顕照論の概要を紹介した。即ち、アドヴァイタ学派における自己顕照論とは、アドヴァイタ学派の仮託 (adyāsa) の理論に関連した重要な理論である。この仮託の理論とは、唯一の实在であるブラフマン=アートマンを、有とも非有とも言い表せない無明 (avidyā) が覆うことによって、ブラフマンに対して様々な性質を誤って仮託し、それを契機にブラフマンが自己展開することによって現象世界が形成される、という理論である。その仮託の理論において、現象世界に存在する対象は認識手段によってその存在が証明されるが、アートマンは認識手段の対象ではあり得ない。しかし、アートマン以外のものは全てアートマンに対する仮託の結果であるから、仮託の結果である認識手段も仮託が無ければ成立しない。同時に、仮託はその基体であるアートマンの实在が証明されなければ不可能である。従って、仮託の理論が成り立つためには、その基体であるアートマンがみずから成立するものであること、即ち自己顕照であることが要請されるのである。

更に第一章では、本稿における上述の問題の所在を明らかにし、アドヴァイタ学派における自己顕照論証に関する先行研究の概要を示した後、本稿における研究の方法を提示した。

第二章 シュリーハルシャに関して

第二章では、シュリーハルシャは、日本の学会ではあまり知られた人物ではないと考

えられるため、彼の生涯、年代、出身地、著作に関して、先行研究を参考にして論じた。即ち、彼は恐らくベンガル地方出身であり、北インドを中心に 12 世紀頃活躍したブラーフマナ（バラモン）階級の宮廷詩人であった。また、彼は多くの著作を著したと伝えられているが、現存するのは Kh と、五大美文体詩（*pañcamahākāvya*）に数えられる *Naiṣadhīyacarita* の 2 作品のみである。しかし、この 2 作品の記述から、他に少なくとも 8 著作を著したことが知られる。

第三章 シュリーハルシャによる識の自己顕照論証

第三章以降では、第一章序論で提起した問題を解決するための具体的な考察を行った。先ず、第三章において、当該の Kh における識の自己顕照論証箇所を解説した。その結果、Kh における識の自己顕照論証とは、「妨害を有さない欲知者に識が生じた時に、正しく知られていないものを対象とする疑惑、錯誤、否定の正知が何れも存在しないことが、欲知対象たる識が正しく知られるものであることを導く」というものであった。更にこの論証形式は、ジャヤンタ・バッタ (Jayanta Bhaṭṭa, ca. 9th 末) の *Nyāyamañjarī* (NM) に紹介されているミーマーンサー学派の自律的真理論 (*svataḥprāmāṇyavāda*) との比較の結果、その自律的真理論の形式を採っていると考えられる。そのため、Kh の自己顕照論証は、第一章序論で言及した知識論の観点からの議論であると言える。そして、Kh において識が自己顕照であるということは、「識が、自分自身に対する疑惑も錯誤も否定の正知も存在しない限りにおいて、自分自身によって正しく知られていること」ということとなる。以上のことから、Kh では、一切の生類の覚知の本質は「自分自身を感受すること (*svātmasaṃvedana*) によって成立するもの」であると、明確に自己認識論を主張している。

第四章 自己顕照論証における *vyatirekapramā* の意義

Khにおける識の自己顕照論証において、「否定の正知」(vyatirekapramā)という概念が登場する。この概念は、Khの正確な読解の上で理解し難いものである。そのため第四章では、否定の正知が、Khの自己顕照論証においてどのような意義を持ったものであるかに関して、Khの諸註釈と、Khと同様の自己顕照論証が見られるチツツカの著書TPの議論も援用しつつ、検討を加えた。その結果、Khの自己顕照論証における否定の正知とは、「知(識)の非存在の正知」であることが判明した。また、欲知対象たる識が存在していない場合には正しい知であるが、その識が存在しているが故に、そもそも誤った知である「非真実の知」たる疑惑と錯誤と並んで、欲知対象を正しく知る知でないものと見做されていることも明らかとなった。更に、否定の正知と同じく「私は認識していない」という認識内容を持つ錯誤と否定の正知の違いを検証することによって、両概念の違いは、その対象である識に対して認識内容上誤っているのか、或いは対象である識の有無に関して誤っているのか、という違いであることが明確化した。そしてその結果、Khのみならず、アドヴァイタ学派の自己顕照論証における否定の正知とは、それが存在しないと述べられることで、対象である識が必ず存在していることを確乎たらしめる、という意義を有するものであることが明らかとなった。

第五章 NMa, Kh, TPにおける識の自己顕照論証の思想史的關係について

続いて第五章では、Khの自己顕照論証は、シュリーハルシャの独創であるのか、或いはアドヴァイタ学派の伝統説を踏まえたものであるのかを検討するため、シュリーハルシャに先行するアーナンダボーダのNMaの識の自己顕照論証を解説した。NMaの識の自己顕照論証とは、「識が対象を認識した直後の刹那に、如何なる者もその認識に対して疑うことはないことから、その認識は輝いている(=正しく認識されている)」ということを引き出すものである。このことは、その認識が成立するために、識自身以外の他の要因に依存しないということを論証する点で、自己顕照論証となっている。

更に、NMa とチツツカの TP を比較検討したところ、TP は、NMa の議論の枠組みをそのまま踏襲して議論を組み立てていることが判明した。更にその比較の結果、チツツカは、NMa において不備を感じた点に関して、同じ議論構造を、NMa よりも厳密に議論を組み立てている Kh の記述を組み入れ、TP の議論を構成していったということが考えられる。また、NMa, Kh, TP の議論を比べてみると、Kh の議論と NMa, TP の議論はほぼ同じ構造を持つものであることが理解される。従って、Kh に先行する NMa との類似から、Kh に見られる自己顕照論証は、シュリーハルシャの独創ではないことが理解される。

第六章 シャンカラの著作に見られるミーマーンサー学派の自律的真理論からの影響

また、アドヴァイタ学派の開祖シャンカラの BSBh と BhGBh に、自己顕照論証ではないが、疑惑 (saṃśaya), 錯誤 (viparyaya), 無知 (ajñāna) の非存在に基づく、Kh の自己顕照論証に近似する議論が見られる。そのため第六章においては、BSBh と BhGBh の各々の議論を解説し、更に Kh, TP との比較考察を行った。その結果、BSBh と BhGBh に、ミーマーンサー学派の自律的真理論の影響があることが明らかとなった。それは、聖典知や主宰神といった、主題となっているものの無過失性を主張する議論において、主題となっている当のものには過失が存在せず、過失はその主題となっているものとは別のものに存在している、と主張する点に表れている。また、この主題となっているものの無過失性を主張するという点と、過失を疑惑、錯誤、無知の三種に分類する点において、シャンカラの議論は、Kh や TP 等の後世のアドヴァイタ学派の著作との一致点が見られることも明らかとなった。従って、シャンカラと Kh や TP における一致点は、Kh や TP が自律的真理論を識の自己顕照論証に応用し、確立していく際の理論的な一つの基礎となったものではないか、と考えられる。しかし、シャンカラの著作には、Kh

の自己顕照論証と同様の自己顕照論証は見られない。

第七章 Bhā における ātman の自己顕照論証

更に筆者は、マンダナ・ミシュラ (Maṇḍanamiśra, ca. 670-720) の *Brahmasiddhi* (BrS) に対するチツカの註釈 *Abhiprāyaprakāśikā* (AP) に引用される、ヴァーチャスパティによるアートマンの自己顕照論証の論証式を契機として、ヴァーチャスパティの著作 Bhā に、Kh における識の自己顕照論証と同様のアートマンの自己顕照論証が見られることを突き止めた。そのため第七章において、Bhā における当該の自己顕照論証が見られる箇所を解説した。その際、自己顕照論証中において「偶来的なものでないこと」(anāgantukatva) と「常住な認識であること」(常住な直証であること nityasākṣātkāratva, 常住な精神性 nityacaitanya) という概念が登場するが、この両概念の関係が明瞭ではなかった。従って、Bhā における自己顕照論証の解説に際して、この二つの概念の関係がどのようなものであるか、またこれら両概念と自己顕照との関係がどのようなものであるのかということ考察した。この考察の結果、「偶来的なものでないこと」と「常住な認識であること」とは、共に「みずから輝くこと」(svaprakāśatva, 自己顕照性) と交換可能な概念であることが明らかとなった。そのため、この両概念の片方が自己顕照論証中の能証 (sādhana) として扱われ、もう一方が所証 (sādhya) として扱われている場合があるが、それは所謂自性論証因 (svabhāvahetu) による論証であると解釈出来る。しかし、これらの用語は実質的には同じことを指示しており、トートロジーとなってしまっている。けれどもこのことから、ヴァーチャスパティは、少しずつ概念をずらすことによって、アートマンが自己顕照であることを、何とか論証しようとしている、ということが窺われる。

第八章 Bhā と中期アドヴァイタ学派の自己顕照論証の比較考察

続いて第八章において、Bhā におけるアートマンの自己顕照論証と、Kh における識の自己顕照論証との比較考察を行った。その結果、Bhā の自己顕照論証も Kh の自己顕照論証も、主題であるアートマンや識に対して、それらが正しく知られないことを妨害する要因が存在しないことから、それらが自己顕照であることを導き出す、というものであり、両者ともミーマーンサー学派の自律的真理論を援用して組み立てられた論証であることが明らかとなった。そのため、Kh の自己顕照論証は、Bhā の自己顕照論証を継承していると考えられる。

しかし、Bhā と Kh とには、主題がアートマンであるか、識であるかという相違点がある。そのため、アートマンの自己顕照論証では必要であった要素が識の自己顕照論証では必要でなくなり、また、アートマンの自己顕照論証では必要でなかった要素が識の自己顕照論証では加わった、というように、自己顕照論証の主題がアートマンから識に変化したことによって、論証の細部が変化してきたことが窺われる。

その、アートマンの自己顕照論証では必要であり、識の自己顕照論証では必要でなくなった要素とは、第一に、アートマンの自己顕照論証ではアートマンの常住性の論証が含意されているということである。しかし、識の自己顕照論証では、可滅なものである日常的な識が主題であるため、識の常住性の論証は含意されていない。第二に、アートマンの自己顕照論証では、「アートマンは、他のものを直接的でない対象として誤信していても直接的なもの (aparokṣa) であり、他のものを想起していても直接的認識からなるもの (ānubhavika) である」ということが主張されていた。この、アートマンが「直接的なものであり、直接的認識からなるものである」ということは、「アートマンは直接的なものではない、或いは直接的認識からなるものではない」と主張する対論者に対して提示する必要のある、アートマンの本性である。しかし、識の自己顕照論証においては、既に主題が「直接的認識からなる」識であり、その識が存在している、顕現しているということから「直接的なものである」ということも述べられていると考えられる

ため、「アートマンは、他のものを直接的でない対象として誤信していても直接的なものであり、他のものを想起していても直接的認識からなるものである」という要素は不要である。

一方、アートマンの自己顕照論証では不要であったが、識の自己顕照論証では加わった要素とは、識の自己顕照論証においては、「知（識）の非存在を正しく知る知」である否定の正知（非存在の正知）が現れることである。日常的な識は可滅のものであるため、存在していたり存在していなかったりするが、論証の主題となっている識は必ず存在していることを明示するために、識の自己顕照論証に際して、この否定の正知は必要な要素である。しかし、常住なアートマンが主題である場合には、アートマンが存在しないことはあり得ないので、この否定の正知は不必要である。

第九章 結論

そして、第三章から第八章までの考察の結果、以下のことが導き出されると考える。先ず、シャンカラの著作には、自律的真理論を援用した自己顕照論証は見られないが、自律的真理論の影響を受けた議論が既に見られる。その議論の一つが、BhGBh にみられる主宰神の無過失性を論証する議論である。アドヴァイタ学派の教義上、この主宰神はアートマンと同一視されている。この主宰神に関するシャンカラの議論が、直接ヴァーチャスパティに影響を与えたかどうかは確定出来ないが、主宰神たるアートマンに対して自律的真理論を適用している点で、この議論がヴァーチャスパティに何等かの影響を与えたことが予想される。

続いてヴァーチャスパティは、恐らくシャンカラの上述の議論に影響を受けたことと、アートマンが精神性 (caitanya), 即ち、認識を自性とするというアドヴァイタ学派の教義から、自律的真理論をアートマンの自己顕照論証に適用させた、と考えられる。管見によれば、ヴァーチャスパティに先行するアドヴァイタ学派の学匠の文献には、自律的

真理論を援用した当該の自己顕照論証は見られない。そのため、自律的真理論を自己顕照論証に援用したのは、恐らくヴァーチャスパティが初めてであったと考えられる。ところで、シャンカラの議論では、過失は疑惑、錯誤、無知の三種であった。しかし、ヴァーチャスパティは、自律的真理論をアートマンの自己顕照論証に適用する際に、アートマンに対して、無知はそもそも適用されないと考え、無知を取り除いたと想定される。更に、対論者に対して、アートマンが直接的なものであることと直接的認識からなるものであることを提示する必要があったため、過失として、直接的でないものとして誤信することと想起を付け加えた、と考えられる。また、アートマンは常住であるという教義上の要請により、その論証に、アートマンが常住であるという主張も含まれることとなった、と想定される。

しかし、ヴァーチャスパティ以後の中期アドヴァイタ学派の学匠達は、自己顕照論証に際し、アートマンの自己顕照論証だけではなく、それとは別に、識の自己顕照論証も行うようになった。そのため、主題がアートマンから識へと変化するに際し、論証方法そのものは継承しつつも、主題が顕現している識であるため、直接的なものであることと直接的認識からなるものであることを提示する必要が無くなった。それ故、過失としての、直接的でないものとして誤信することと想起とが、再び取り除かれることとなったと想定される。また、主題が日常的な識であるため、識が常住であるという要素も論証から取り除かれることとなり、その代わりに、主題である識が必ず存在していることを提示するため、過失として、否定の正知が加わったと考えられる。以上の過程によって成立したのが、Khにおける識の自己顕照論証であり、また、TPにおける直接的認識の自己顕照論証であると考えられる。しかし、NMaにおける識の自己顕照論証は、KhやTPの論証に比べてまだ形式が整っていないため、BhāからKh、TPへと至る過渡的段階の論証であると想定される。

以上のことから、Khに見られる識の自己顕照論証は、シュリーハルシャの独創によ

るものであるのか、或いはアドヴァイタ学派の伝統的な教説に依るのか、という問題点に対しては、以下のように言うことが出来ると考えられる。即ち、Khに見られる識の自己顕照論証は、シュリーハルシャの独創ではなく、少なくともヴァーチャスパティにまで遡れるアドヴァイタ学派の伝統学説である。

第二部 資料篇

第二部資料篇では、第一部で扱った文献のテキストと和訳を掲載した。第二部で和訳を掲載したものは、今までに和訳が発表されていないものである。

第一章 *Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā* のテキストと和訳および諸註釈のテキスト

先ず第一章において、Khにおける識の自己顕照論証を行っている箇所に関して、刊本7つ、写本3つに基づいて校訂テキストを作成し、その和訳を掲載した。更に、筆者が参照し得た Skt. の諸註釈書に関しても、各刊本を比較した結果としてのテキストを掲載した。また、年代の新しい註釈には、先行する註釈からの影響が見られるため、脚注において、その註釈が影響を受けたと考えられる先行する註釈の部分を提示し、各註釈間の影響関係が参照し得るようにした。

第二章 *Nyāyamakaranda* と *Tattvapradīpikā* のテキストと和訳および各註釈のテキスト

第二章では、第一部で検討を加えたアーナンダボーダの NMa とチツツカの TP のテキストと和訳を掲載した。更に、NMa に対するチツツカによる註釈書 *Nyāyamakaranda-vyākhyā* (NMaV)、TP に対するプラティヤック・スヴァルーパ (Pratyaksvarūpa, ca. 13th) による註釈書 *Nayanaprasādini* (NP) のテキストを掲載した。TP と NP に関しては、刊

本2つと写本1つに基づいた校訂テキストであり、NMa, NMaV に関しては、刊本に基づくテキストである。

第三章 *Bhagavadgītābhāṣya* と *Bhāmatī* のテキストと和訳

第三章では、第一部で検討を加えたシャンカラの BhGBh ad BhG 13.2 のテキストと和訳、更にヴァーチャスパティの Bhā ad BS(Bh) 2.2.28, 2.3.7, 2.3.18 のテキストと和訳を掲載した。BhGBh と Bhā のテキストは、諸刊本を比較した成果を掲載したものである。